

昭和 10 年代における〈文化〉論：Ⅱ ——日本文化／大東亜文化／世界文化

"Culture" in the Showa era 10's (1935 - 1944) :II
— Japanese culture, Greater East Asia culture(Oriental culture), World culture

松本和也*

Katsuya Matsumoto

Abstract

This paper presents the investigation and analysis on theories of culture in the Showa era 10's (1935-1944).

First, in order to show the aim and direction of this paper, we consider the "culture" theory on the eve of the outbreak of the Pacific War with reference to the previous research.

Next, we analyze the various "culture" theories that were actively discussed after the Pacific War. The first thing we pick up is the "culture" theory that was discussed immediately after the war broke out. In the theory, a new "culture" theory was discussed as the Greater East Asia culture theory in line with the expanding Greater East Asia mutual prosperity zone.

The second one we pick up is a Japanese culture theory based on the dichotomy between Western culture and Oriental culture. In the theory, the history and characteristics of Japanese culture were discussed. The third one we pick up is a discussion related to the cultural work:how to spread Japanese culture to the peoples of the Greater East Asia mutual prosperity zone. As mentioned above, this paper analyzed what words and rhetoric organized the "culture" theory that was created from its deep connection with the Pacific War.

Finally, we compiled this paper while examining the remarks of Kunio Kishida, a key person in the culture in the Showa era 10's.

1：序論——問題関心

この論文では、前稿¹にひきつづき、昭和10年代における文化論について検討を試みる。

本稿の見取り図をあらかじめ提示しておく。まずは、関連する先行研究の指摘をふまえて、太平洋戦争開戦前夜の〈文化〉論の検討によって、本稿のねらいと方向性を示す。次に、太平

洋戦争開戦後に盛んに議論されていく多様な〈文化〉論を、時期的・内容的な分節を施しながら、分析していく。第一にとりあげるのは、太平洋戦争開戦直後の〈文化〉論で、そこでは太平洋戦争に関わる〈文化〉の位置づけを示しつつ、拡張していく大東亜共栄圏に即して、大東亜文化論として新しい〈文化〉が論じられていた。第二にとりあげるのは、西洋文化／東洋文化の二項対立を前提とした日本文化論であ

* 文教大学国際学部（非）

り、そこでは、日本文化の来歴や特徴が論じられていた。第三にとりあげるのは、大東亜共栄圏の諸民族に対して、どのように日本文化を広めていくかという、文化工作に関わる議論である。こうした、昭和10年代後半に、太平洋戦争との深い関わりから生みだされた〈文化〉論が、どのような言表-修辞によって編成されていたのかを分析することが、本稿のねらいである。最後に、昭和10年代における〈文化〉論のキーパーソンであった岸田國士の発言を軸に、太平洋戦争末期における国内向け〈文化〉論を参照した上で、結論として〈文化〉の変容を跡づけた。

さて、昭和10年代の〈文化〉に関する先行研究²は散見されるが、本稿と近い問題関心からの議論はあまりみられない。ここでは概論として、赤澤史朗の議論を次に引いておく。

戦時下の偏狭なイデオロギーを背景とする思想抑圧と、文化活動を支える物的条件の窮乏化は、あらゆる文化というものを総じて貧しくみじめなものにしていった。しかし戦時動員体制の形成は、それ以前からの社会構造の変容をいっそう促すことによって、それにとまなう新しい文化活動の展開を生み出すべく作用した面があり、また他方からするとこうした戦時動員体制は、結局のところ、文化の生産にとって不可欠の自由の領域を、完全に押しつぶすことができたわけではなかったのである。³

上の箇所は前稿でも引用したが、本稿では前稿と異なる観点から疑義を呈しておく。赤澤の議論は、種々の文化(活動)を善、戦時下のイデオロギーや戦時動員体制を悪、とする善悪二元論によって構成されている。しかし、実際は本稿で後述していくように、多様な〈文化〉論およびその書き手もまた、積極的に戦時下のイデオロギーに加担していく局面が多々あった。太平洋戦争(の進行)との関わりを重視する本

稿では、そうした同時代の歴史の中で、どのように〈文化〉が語られ、変容していったかを具体的に検討したい。

ここで、以後の議論の前提ともなる、太平洋戦争開戦直前の〈文化〉論を参照しておく。

まずは、大串兎代夫・佐藤得二・土屋喬雄・永井浩・藤野恵・松前重義・船田中「新日本建設と文化」(『政界往来』昭16・6)をとりあげる。タイトルに《建設》という、昭和10年代〈文化〉論のキーワードも織りこまれた座談会から、永井による日本文化論を次に引く。

文化の問題、殊に今の日本文化といふことを考へる時には、所謂東亜共栄圏内に於ける文化といふものを考へて見なければいけない。〔略〕殊に吾々に関係の深い東亜共栄圏内に於ける民族と民族が本当に根柢からお互ひに手を握つて行く為には、どうしても共栄圏内に於ける民族の政治的、経済的、文化的、または宗教的、或は人類学的結合といつたやうないろ／＼な方面から本当に十分な民族の研究といふものをやつて行かなければならん時だと思ふのです。(104～105頁)

こうして永井は、日本文化が大東亜共栄圏の文化へと拡張していくことを前提に、他民族との連携のための道を《民族の研究》に求めている。他方、藤野には次の発言がある。

日本文化の将来といふものは、前に申上げたやうな日本文化本来の特色、つまり肇国の大精神をずつと生成発展せしめる一途といふものを愈々これを推進めつゝ、而もこの上に更に外国の文化の粹といふやうなものをも、曾てありしが如く、尚ほ将来においても十分に取入れながら、日本本然の文化といふものを益々成長させて、初めて本当の日本の世界的な使命といふものの達成が出来るのではないかと思ふ〔以下略〕(119)

頁)

ここで藤野は、《日本文化本来の特色》を核としながらも、外国から《文化の粹》を取り入れることで、《世界的な使命》を達成していくという道筋を描いている。双方とも、日本の政治外交-時局の新たな展開にあわせて、〈文化〉のありかたを論じていたことになる。

また、文化工作としての国際文化事業については、無署名「巻頭言」(『国際文化』昭16・6)に、この時期の範をなすと思しき次のような指針が示されている。

我国の東亜共栄圏確立の爲めにする文化事業は従つて次のやうに考へられる。一つは東亜諸民族に日本文明に対する認識をハッキリと持たせることである。彼等と同種の文化的淵源を持つ日本が如何に現代的国家にまで発展したかといふことを理解させることである。一つは彼等の文化の向上発達に協力し援助することである。も一つは東亜共栄圏諸国間の文化的紐帯を結成させることである。この三つの方面に我国の指導者としての任務があるのではないかと思ふ。(1頁)

上は、《東亜諸民族》という単語から太平洋戦争開戦後の言表にすらみえるが、新体制運動(言説)以降の発想であることは間違いない。同様に、東西文化の対比から世界文化へと論及していく船山信一「新世界文化と日本文化——論理の問題を中心として——」(『国際文化』昭16・10)もまた、次に引く通り、後述する太平洋戦争開戦後の言表に近似している。

現在要求されて居る新文化としての新世界文化は、東洋文化と西洋文化との彼方に考へられるものではなく、又東洋文化と西洋文化との何れか一方を否定して他方を世界的に拡大するものではなく、更に又世界

的普遍性を抜きにして、東洋文化と西洋文化、更にはもろもろの国民文化を並列的に、単に多元的に考へるところに成立するものでもない。新世界文化はもろもろの国民文化、東洋文化と西洋文化といふ多元性を含みつつ、しかもそれらのものの統一として考へられるものでなければならぬ。

新文化とは東洋文化への再反省を強く行ひつつ、しかも西洋文化を高い立場に於て活かすものである。東洋文化と西洋文化との総合といふ、よくいはれる主張を本当に実現することが、新しい世界文化としての新文化の創造に外ならないのである。(3頁)

これらの言表に看取される太平洋戦争開戦への予感-時局意識は、次に引く森戸辰男「臨戦段階における文化建設」(『中央公論』昭16・11)にも、よくみられるものである。

臨戦段階を正しく把握することは、高度国防国家における文化建設の任務をなほざりにさせるどころか、かへつてその緊迫性についての認識を一段と深めることとならう。といふのは、時局の深刻化に伴ふ文化的諸問題が、文化の内部から差迫つてこの任務を要望してゐるだけでなく、喫緊の国家目標であるところの生産力拡充と挙国一致とがまた、かつて私が文化における神話的契機と企画的契機と呼んだところのもの力強い振起なしには、たうてい達成しえられないからである。(4~5頁)

ここで森戸は、戦争の遂行には文化の力が必要だと主張していることになる。こうした主張から想起されるのは、新体制運動の一翼を担いつつ、大政翼賛会文化部長として「文芸の側衛的任務」(『文学界』昭15・12)を主張した岸田國士である⁴。その岸田は、松本潤一郎・岸田國士・三木清・大串兎代夫・津久井龍雄・穂積七郎・室伏高信「文化の運命」(『日本評論

昭16・12)において、〈文化〉論が隆盛になった要因を次のように捉えていた。

文化といふ言葉の流行といふ所からいへば、これは言葉だけが流行することでもないけれども、やはり戦争に依つて文化が脅かされるといふ、さういふ不安が一番基礎になつて居ると思ふのです。それに対して文化の破壊戦争——文化の破壊ぢやない、建設だといふ議論が出たり或は戦争は文化の母体でもあるといふやうな議論が出たりするといふやうな所から文化が戦争と結付けて、多くの人の関心を引き始めた。(225頁)

ここでも、戦争が契機となって〈文化〉が取り沙汰されている。しかもこの座談会で岸田は、《僕は広い意味での文化を——まあ口でいへないのですが、結局一つのものになり、民族を価値づけるもの、これが文化だと思ふ》(229頁)といった発言をしてもいた。

以上を総じて、太平洋戦争開戦前夜から、すでに〈文化〉論は戦争を意識して展開されており、そこでは、大東亜共栄圏を視野に収めた日本文化の位置づけまでが議論されていた。ならば、太平洋戦争の開戦によって、〈文化〉論にはどのような変化が生じていくのか。

2：太平洋戦争開戦後の日本文化論

2-1：大東亜文化論の形成

太平洋戦争開戦後には、開戦の感動を表明した文章が多く発表される⁵が、ほかに、この戦争の意義を説く言表も、それに劣らず多数発表された。ここではその一例として、室伏高信「大東亜戦争と国民の覚悟」(『新文化』昭17・1)から、次の一節を引いておきたい。

我々がこの戦争に勝つ唯一の道は、日本の国民が、ほんたうにその祖国愛のうちに、

みんなが溶け込むといふことであると同時に、単なる日本の祖国愛のみに止まらず、全亜細亜を日本の兄弟とする広大な精神をもたなければならない。(11頁)

このように、直接は英米を敵としてはじまった太平洋戦争だが、それは西洋対東洋の覇権争いでもあり、東洋の盟主たる日本は、大東亜共栄圏を擁して西洋に勝つことが至上命題とされる。開戦の報を受けて開催されたと思しき、加田哲二・中島健蔵・大串兎代夫・津久井龍雄「文化戦争(座談会)」(『文芸』昭17・1)から、〈文化〉論の論点を確認していこう。

第一として、中島に《差当り英米が正面の敵で、英米の文化も問題だけれども、僕はやはりヨーロッパ文化といふものに対する一つの戦争だと思ふ》という発言がある。つまり、中島は太平洋戦争の直接的・具体的な敵は英米(文化)だが、本質的・抽象的にいえば、文化レベルでの敵は西洋文化だというのだ。さらに、《ドイツやイタリーは従来のヨーロッパ文化に対して反旗を翻して居るわけですが、つまり内部的な一つの革新勢力と見てよいと思ふ》(29頁)という見方を付すことで、日独伊と旧来の西洋文化という対立軸を示していく。

第二として、津久井が提示する、《大東亜共栄圏の問題だが、一つは思想的に東亜といふものが結合し得るやうな紐帯が何かあるかどうか》、《もう一つは物質的或は経済的に今迄よりも民族が幸福になれるかどうか》、《今一つは東亜の思想とか文化といふことで、東亜が一体になり得るやうな共通の思想的な根柢があるかどうか》という一連の問いがある。まとめれば、大東亜共栄圏を目指すのはいいとして、その具体的な手段や根柢への疑問である。津久井はさらに、《殊に支那と日本の問題は一番重大な問題であつて、支那は今の所東亜的な思想で動いてゐないだらう》、《欧米流の思想で動いて居るんぢやないかと思ふのだが、それを克服して東亜本来の共通の思想で手を結び得るやうにしな

くちやならぬ》(35頁)と、新たな南方各地の問題以前に、すでに進行中の対支政策の困難を指摘していた。

これと関連して第三に、大東亜共栄圏については、中島が次のように述べていた。

大東亜共栄圏なるものを吾々が目指して居る、相手もその理想に引張込まなければならぬといふ時に一種の闘争が必要なんだが、その闘争に勝つやうな文化の陣立てが必要なのだ。今度は相手が支那ぢやない、支那には古くて高い文化があつたかも知れないけれども現在の段階では非常に遅れて居る、今度はさういふ所でなくて従来の支配者が既に固有の侮れない文化を持つて居るのだから世界的の水準を相手にして居るといふことをよく覚悟することも大切な問題だと思ふ。従つて紐帯になる思想的の文化といふものも非常に高度のものでなければいけないと思ふ。(36頁)

ここで中島が問題にしているのは、米英がすでに占領してきた大東亜共栄圏各地において、いかにして日本文化の《陣立て》を構えていくのか、という新たな課題である。

このことに関わるが、第四の論点として、次に加田が指摘する日本文化の特殊性がある。

兎に角日本的なものを吾々は持つて居る、ところがこの日本的なものといふものは非常に特殊な形態に存在して居るのだ、之を特殊の形態の儘で外国にやつても向ふの人間には解らない、その特殊なものを一般的な形態に翻訳し直して外へ出してやるといふことが対外文化政策の最も必要な所ぢやないかと思ふのです。(37頁)

こうして検討してみれば、「文化戦争」という勇ましい座談会のタイトルに反して、ここには、太平洋戦争開戦後に大東亜共栄圏の想定が

不可避となった時点から、新たな地域での文化工作という課題が生じ、それゆえ〈文化〉論が直面した困難が浮きぼりにされている。

その一方、単なる愛国的高揚をこえて、太平洋戦争開戦を捲土重来の好機と捉える言表もある。小栗一雄・牧野吉晴・尾崎一雄・浅野晃・大鹿卓・塚原富衛・柳山潤・佐藤彬・堀場正夫・筒井敏雄・中谷孝雄・富澤有爲男「文化に於ける米英膺懲(座談会)」(『文芸日本』昭17・2)は、座談会タイトル自体も十分に好戦的だが、その中で浅野は、《吾々の英米膺懲は幕末の尊皇の志士が当時志して果し得なかつた事》だとした上で、次のように述べる。

何とも云へない歴史的な日なんだけれども十二月八日は、その十二月八日の日で尊皇攘夷の志士の志が始めて生きたのだと思ふのだ、だから吾々はさういふ志を継いで今米英を膺懲しなければならぬと思ふのだね、さういふことが矢張僕は英米文化膺懲の本当の問題だね。(27頁)

明治維新期の尊皇攘夷の想起は、日本において近代化が進む以前、別言すれば西洋文化が入りこむ以前の日本文化が保持されている(と設定される)状態への、回帰志向である。《米英を伐つことは、即ち又文化上の米英をうつこと》だと断じる保田與重郎もまた、「大東亜文化政策論」(『文芸日本』昭17・2)において、それを《わが明治十年以降の文明開化思想を明白に判断し、その伐つべきを伐つこと》(9頁)だと変奏し、《今や日本文化の使命は、この民族の叡智を土台とし、その上に神州不滅八紘為宇の文化を築かねばならぬ絶対の日である》、《我々が解放した民族に与へる宣撫慰安の文化は、本源に於て人類の全部に提示する文化の一つでなければならぬ》と主張して、次のように日本文化のあり方を示していく。

まづ内を正すことがあくまでも先決であ

る。世界の民族に対して、わが文化を宣揚する方法に於ても、やはり問題はまづ内にある信念に帰す。世間には我国の古の道の哲学では異民族に及し得ないと云ふ者があるが、恐らく彼らは今日我国の立つ立場の絶対背水の形を悟らず、その時の起死回生のあり方について思ひ及ばぬものであらう。さらに彼らはわが古の道の哲学を組織した近世国学者の思想を、現在のことばでよみ得ない者である。もし文化思想の原理が、神州不滅の哲学になれば、世界維新といふことばは欺瞞となるのである。我々の国の文化の歴史に於て、公式の文化の殆んどすべては、他の国の文化によつて支配されてきた文化である。たゞそれらの中に於て、わが国学のみは、天皇が世界を治めず思想を大本に奉じて、真の世界文化論をうちたてたものであつた。(10頁)

こうして保田は《国学の抱蔵した思想が、真の日本の立場による唯一の世界文化》(11頁)だという根拠を掲げながら、日本文化を世界(文化)へと及ぼしていくことを《我々の民族的大使命》(12頁)と位置づけ、大東亜文化論のゆくえを次のように提示していくだろう。

欣然としてこの日を迎へて、我らの護持してきた国学の精神が、文化政策の絶対唯一の精神であり、興亜文化理論の唯一原理なる意味を云ふ次第である。文化はすでに銃後奉公の域より、皇道の世界宣布の道へ、その本来の任務に立ち、最も本質的な激越な長期の戦ひに従はねばならぬのである。(17頁)

太平洋戦争開戦後からこうした議論が噴出していくうちにも、日本軍は昭和17年2月15日にはシンガポールを陥落させ、軍政を敷くことになる。つまりは、これまでイギリスが支配していた地域を新たに日本が治めることが、具

体的・現実的な課題となったのだ⁶。

こうした戦局の展開をうけて、次々と大東亜文化論が発表されていく。樺俊雄は「大東亜文化への道」(『日本評論』昭17・3)において、まずは〈文化〉の意義を次のように示す。

大東亜戦争は大東亜の地域から英米の帝国主義的勢力を駆逐することを目的とするものであると同時に、反面においては大東亜の諸民族を英米の桎梏から解放して、これを大東亜の新秩序建設へ協力させるといふ建設的目的をも有するものである。従つて、大東亜戦争の完遂には一面武力が必要であるとともに、反面には文化力が必要となるのである。(190頁)

もちろん、大東亜戦争に《武力》とあわせて必要とされる《文化力》とは、西洋文化とは異なる、何かしら新しい〈文化〉でなければならぬ。樺は、次のようにつづける。

われわれがいま建設しようとする大東亜文化は物質文明としての西洋文化ではなく、むしろこれを否定するところに成立すると云へる。〔略〕むしろ近代ヨーロッパにおいては矛盾に陥れる精神的なものと物質的なものとを新しく総合するところに、われわれの将来の文化は成立すると考へねばならぬのである。(195頁)

こうして、新しい〈文化〉としての大東亜文化を掲げる樺は、《大東亜文化と称するものが成立するためには、大東亜の諸民族に固有な特殊の諸文化の間に普遍性がなければならぬ》(196頁)と述べ、その《共通地盤》には《科学的技術が不可欠》だと述べてもいた。《現実生活においてかやうな相互接触が保たれることによつて、大東亜文化と称される如き、諸民族の特殊な諸文化に共通する普遍性が実現する》(197頁)のだという見通しを示す樺は、新た

な他者でもある《諸民族》と大東亜文化を共有するために、科学技術という《普遍性》を重視していたのだ（こうして、大東亜文化に科学技術＝西洋文化が埋めこまれる）。

また、《大東亜戦争は西洋文化、特に英米文化に対する根本的批判といふ課題を我々に課して居る》と捉える船山信一も、「大東亜戦争と新文化の理念」（『中央公論』昭17・3）において《英米文化は旧文化であり、その克服なくして新文化はない》（45頁）と断じて、新文化としての大東亜文化を掲げ、そのための急所について、次のように言表する。

我々がさういふ立派な文化を創造しようとする場合、先づ為すべきことは、日本文化の伝統を反省することである。世界新秩序の原理たるべきものは日本にあり、そしてさういふものは国内原理に於ても、そして又単に政治の領域に於てのみならず、道徳、芸術、更には科学の領域に於てさへも見出されるであらう。〔略〕新しい文化が東洋から生れるためには、日本人自身が文化的に自信をもつと共に、他のアジア人に日本に対する信頼と、彼等自身の自信とをもたせることが必要である。（45頁）

《日本文化の伝統》を重視する船山は、それを《世界新秩序の原理》としつつも、東洋から新文化をたちあげていくために、《大東亜戦争に於ける文化問題の中心はやはり支那にある》（47頁）という判断を示す。太平洋戦争開戦後の〈文化〉論においても、中国はネックであったようだ。特集「大東亜文化の為に」（『新文化』昭17・3）に「東亜共栄圏の文化的諸問題」を寄せた新明正道も、《共栄圏建設のための文化政策においては、あくまで中国国民としての文化に第一義的な対象性を与へ、その文化的伝統を尊重するとともに、これに巢喰つてゐる文化独善主義を打破し、文化的協同の見地において、東亜文化の総合を促進することを以て我々

の指導の方針たらしむべきものと考へざるを得ない》（9頁）と言表している。ただし、これは中国のみを特別視するものではなく、新明は大東亜文化（の波及）を二段階で構想していたのだ。新明は《南方において我々が新たな接触を生じつつある諸民族は、現実において、これ〔対中国〕と同一の意味で文化政策の対象とはならない》、《何故ならば、彼等においては中国国民におけるやうな有力な文化が存してゐるわけではないから》（9頁）だというのだ。そして、《諸民族》への対策として新明は、次の案を示している。

我々はむしろ米英の音楽やダンスや映画に対して、これを凌駕した音楽やダンスや映画を〔《南方の東亜諸民族》へ〕与へてゆかなければならぬ。この文化の代償的政策が聰明に遂行されるならば、文化的に従順な此等の諸民族は急速に周辺の文化において、我々と文化的に有機的な接合点を見出すにいたることは明かである。この際も、我々が文化政策の眼目として銘記すべきことは、彼等をその文化的無色性の故に低級視することなく、あくまで彼等を東亜の民族として文化向上の協力者に育成してゆく信条を把持することである。（11頁）

こうして新明は、新旧他民族への文化工作を通じて、《我々は自ら文化的に有力に強くなることにより、はじめて東亜共栄圏文化の建設に成功し得る》（12頁）のだという見通しを示す。しかもそれは、同特集内の「人間形成と文化」において樺俊雄がいうように、《諸民族を解放して新文化の建設に協力させようとする》（19頁）という戦争の目的にも叶う。

2-2：日本文化／大東亜文化／世界文化

もちろん、こうした大東亜共栄圏を視野に入れた議論は、〈文化〉論に限られたものではない。特集「大東亜建設の根本理念」（『中央公論』昭

17・3)に寄せた「大東亜戦の精神史的意義」において酒枝義旗は、大東亜戦争の使命を、次のように説いていた。

国防的使命は重大である。然し大東亜戦の使命はこれにつきののではない。それは更らに積極的に大東亜共栄圏の建設の基石を据える使命を帯びてゐる。数百年来西欧人の搾取と圧迫のもとに、輝かしき陽光、豊かなる天然の中に生れながら、幽暗そのものの中に坐するが如き生活に甘んぜしめられて来た人々を解き放たなければならぬ。(20頁)

こうして酒枝は、《第一の使命》が《即日本的なそれ》、《第二の使命が即東亜的》と意味づけた上で、《残る第三の使命こそは、まさに即世界的としての意義を有つ》(20頁)として、以降、論文の大半を費やしてそのことを論じ、次の結論に至る。

人類の生活意識を抑へつけて、精神をその捕囚として捉へて来たもの崇拜の桎梏より、真に国と人とを解放することこそ道義日本の戦の即世界的意義でなければならぬ。かくてもものの為めに奔走し、ものの在りかたの如何によつて或は憂ひ或は喜び、或は驕り或は嫉み、或は諛ひ或は憎む人と国とが、真に主体としての生活を樹立し、世界をして共存共栄の理想の実現に強き一歩を踏み出さしめることこそ、我邦の偉大なる使命でなければならぬ。さればこそこの戦はまさに聖戦としての意義をもつ。(29頁)

こうして酒枝は大東亜戦争に、《日本的／東亜的／世界的》という三層の意義を見出していく。やはり同特集に「大東亜戦争の世界史的意義」(『中央公論』昭17・3)を寄せた樺俊雄は、《世界史をばヨーロッパ世界のヨーロッパ以外

の拡大としてではなく、ヨーロッパ世界がその本来の姿に帰るとともにアジア世界にはアジア諸民族の文化が建設されねばならぬ》、《そのためには何よりも英米の帝国主義的勢力をアジアから駆逐することが必要》だと述べる。その上で、樺は日本文化の来歴と意義とを、次のように言表していく。

日本文化は仏教文化や儒教文化や近代ヨーロッパ文化を受容しながら発展した。たしかに日本においては文化の異質的なものを受容する毎に著しい発展を遂げたといへる。しかし、その受容せる異質的なものは日本的なるものにおいて消化され統一されたのである。そこに日本文化の発展性と包容性とが見られるのであるが、かやうな性格をもつものとして日本文化は新しきアジア文化の指導者となる資格を具へてゐるのである。新しき世界史における日本文化の指導性もこゝから考へられ、かゝる文化の建設を目指すものとして大東亜戦争は世界史的意義を有すると考へられるのである。(38頁)

ここでは、樺もまた〈文化〉を日本文化／アジア文化／世界文化の三層で捉えている。樺俊雄は「新文化のために」(『新創作』昭17・3)においても、《大東亜共栄圏の地域から英米の文化を駆逐して新しき文化を建設するといふことは、とりもなほさず、大東亜文化圏を確立するといふことでもあるが、しかしそれは単に大東亜といふ一地域における事件ではなくして、同時に世界的意義をもつ》(10頁)と声明した上で、次のように詳論している。

ドイツがヨーロッパ文化の世界的支配を意味するヨーロッパ主義的世界史の改編を志すものだとすれば、わが日本もこの世界史の改編において一致するのであつて、そこに日本の指導のもとに生るべき東亜文化

が、おのづから世界史的な意義をもつものであることが分るのである。しかも、その文化は近代ヨーロッパ文化の陥つ精神文化と機械文明との矛盾の克服の方向にあることも分るのであつて、このことがまさに西洋文化の打倒と東西文化の融合といふ表現のなかに表はされてあるものだと云へるのである。(15頁)

太平洋戦争開戦後における新しい〈文化〉を、日本文化／東亜文化／世界文化(《世界史的な意義》)の三層によって意味-価値づけていく言表-修辞は、この時期に大東亜文化を論じる言説によくみられる。その端的な例として、室伏高信「時評 大東亜文化とは何か」(『日本評論』昭17・3)がある。《日本はもとより日本独自のものをもつてみた》という室伏は、《旧石器時代をもたないわが国においては、その原始文化はこの国土においではなく、神々の間において生れたと見るべきであるし、われわれは国生みに先だつ遠い昔からの文化をもつてみた》(18頁)という立場から、《われわれは西洋に学び、模倣し、これを吸収し、消化して今日の偉大と文化とをつくりえた》と、近代化以降の来歴にもふれ(樺のいう《発展性と包容性》)、さらに日本文化の段階的發展を次のように論じていく。

日本は嘗つて印度文化と支那文化とをとりいれ、それによつて自らを育て、またそれによつて自己覚醒し、そして遂にこれを統一して、旧東洋文化の最高実現者となつたやうに、日本はその東洋文化の基礎のもとに、西洋文明をとりいれ、これを消化し、自己のものとするによつて、西洋文明を乗り越え、一層高次のものへと自己發展し、また發展しつつある。これが今日の日本であり、また益々明日の日本である。(21頁)

さらに室伏は、《われわれは日本文化、東洋文化、世界文化をこのやうに考へ、このやうに総合し、このやうに統一する》とまとめ、《これは日本文化でもあり、東洋文化でもあり、世界文化でもある》(22頁)と、日本文化を核として三層に重ねられた〈文化〉を提示した。もとより、こうして語られる世界文化とは、新野敏一『文化政策と文化運動』(扶桑閣、昭17)で説かれたやうに、《ただそれを生産した民族に有意義であるだけでなく他の民族にとつても有意義であり、他民族の生をも指導し、開発し耕作しそして支配し得る能力のある文化を云ふ》(27頁)のである。つまりは、個別性とともに普遍性をもった文化なのである。

こうして積み重ねられた大東亜文化論は、中村彌三次「大東亜新文化の創造」(『政界往来』昭17・4)に至ると大東亜文化政策にまで及んでいく。《米英的な物の観方、米英的な物の感じ方、さうした一切の精神的形成をも悉く破碎し清掃するのでなければ、決してアジアの精神的独立、大東亜新文化の創造をその完全な意味において期待することはできまい》(39頁)という中村は、次のように《諸民族》に対する文化工作の指針を示していく。

大東亜文化政策とは、大東亜の統一的な核体たる日本国家が、大東亜全体文化の固有価値及び特質を確認して、それに適する一定の文化理想を掲示し、かつこれが実現及び育成に要すべき、乃至は広く国策の文化的実現に資すべき諸般の組織及び作用を定立し、これによつて大東亜諸邦諸民族のあらゆる文化活動を指導し統制せんとする根本方針をいふのである。(40頁)

ここでは、日本が《大東亜諸邦諸民族》を文化的に指導していくこと、その際、《大東亜全体文化の固有価値及び特質》に配慮した上での文化工作の実施が謳われている。

以上、本節で検討した〈文化〉論の特徴を、

前節で参照した船山信一「新世界文化と日本文化」(前掲)を補助線にまとめておく。第一に、太平洋戦争開戦後における〈文化〉論は、開戦前の東西文化を対比したものから、日本文化を核として同心円状に大東亜文化、世界文化の三層へと構造化される。第二に、同心円状に拡張可能な、核としての日本文化は、きわめて高く位置づけられ、それに伴い第三に、日本文化は世界史的な意義を担う新文化であると同時に、そのルーツ・起源でもあるという、両義性をもつ〈文化〉として語られていた。

3：東西文化を総合する日本文化

太平洋戦争が開戦以来の攻勢期から守勢期⁷に入ってもなお、日本文化を戦争-大東亜共栄圏との関わりから積極的に意味-意味づけていく〈文化〉論は産出されつづけていく。そこでは、戦局の展開に連動するように、《今まで『日本的』と規定されてきた性格を、一層『東亜的』に発展せしめねばならない》(長谷川如是閑「文化的性格の更新——東亜的性格の新発見——」、『日本評論』昭17・7、12～13頁)といった拡大路線がみてとれる。他方、日本主義的な〈文化〉論として、北畠親房を参照しながら《「なり」は、日本の国民によつて護持さるべき最大の文化感覚である》、《この文化感覚のみが、みいくさを讃へ得る》、《これのみが、真珠湾頭に散華し給ふた九柱の神々を讃へる文化的力量である》(106頁)と主張する、田中忠雄「文化感覚の一新」(『文芸春秋』昭17・6)のような議論もみられた。

そうした中、無署名「後記」(『中央公論』昭17・8)では、次の問題提起が示される。

今日の文化をいひ、そのあり方を論議する前に、何よりもまづ、文化そのものの新たな概念規定に迫られるのである。その際、政治・経済及び文化といった個別的な並べ方を一応おいて、私たちはむしろ政治経済

科学技術は勿論その他文芸思想諸般に跨がり、それらを抱合する総合的な立場において、文化を観ようと思ふ。固より「文化」は、よりよき国家的生存・民族的あり方を形成してゆく私たちの営みの全体としても理解されるからである。(256頁)

ここでは、領域横断的な〈文化〉が国家-民族と密接に関わるものとして再定位されているが、上の記事が掲載された『中央公論』巻頭では、文字通り〈文化〉が主題とされていた。

無署名「巻頭言 優秀文化主義と新総合文化観」(『中央公論』昭17・8)では、《大東亜の大は決して単に地域的大を意味するものではない》、《大東亜の大は文化の質における優秀を主として意味すべきものでさへある》という前提を確認した上で、《地域的大東亜を移して、化して文化的に世界的に極めて優秀なるものとなすことが即ち大東亜戦争の使命》(1頁)だとして、大東亜文化を世界的なレベルへと押しあげることを謳われていく。さらに、同文では、《正しき意味においての日本中心の大東亜総合文化建設から進んで完全に広大な範囲を蓋ふ総合文化建設に行くためにも、文化における特殊性と結合せる普遍性を、ある意味においての求心の一極と遠心的他極との関係においてわれわれは今深く把握せねばならない》(3頁)として、《新総合文化》=新しい世界文化を建設を目指し、日本文化をもって広大な地域をカバーするために《特殊性》と《普遍性》の《結合》が求められていく。

こうして、大東亜共栄圏に伝播していく普遍性が求められる日本文化については、同時に、その固有の来歴-特徴もまた議論=再-創造されていく。廣濱嘉雄は「日本文化の弘通」(『中央公論』昭17・8)において、《大東亜圏に弘通すべき日本文化》とは《政治と対立せしめられるやうな文化でなく、政治も経済も思想も教育も、さては、宗教も道徳も習俗も法律も含んでの文化でなければならぬ》ような、《所謂広

義文化としてでなければならぬ》(6～7頁)と説く。さらに、廣濱は日本文化を《模倣の文化ではなくて創造の文化》だと定義し、くわえて《その創造に当つて、手段の模倣に徹して、広く異質文化財を摂取し同化したことも亦、他民族の文化に見られない独自性を示すもの》(11頁)だと述べ、西洋文化に対峙する大東亜文化(東洋文化)確立のアキレス腱ともなり得る、明治以来の西洋文化摂取を再-創造の一過程に落としこんでみせた。さらに、廣濱は《日本文化に摂取されてある豊富な異質文化を手がかりとし、八紘為宇の精神に帰一して、大東亜圏内の諸民族が各々固有の文化を発展せしめることに寄与する底のものでなければならぬ》(15頁)と主張していた。

逆に、長谷川如是閑は「文化性と生存性 民族文明の逆説的性格」(『中央公論』昭17・8)において、《東西文明の性格のそれ／＼の特徴といふ視角から、わが日本文明の性格を見ると、殊に一層東洋的であるに相違ないが、しかしそこには、大陸の文明と異なるいろ／＼の重要な特徴がある》とした上で、《その最も重要にして且つ有力な点は、日本文明に於ける民族的性格の統一的形成と、その不断の持続》(28頁)だと指摘し、《民族的性格》を日本文化の根柢として、ことにその排他的な《形成》と《持続》を強調していた。

上の二つの言表は、日本文化の来歴に関して、多様な文化を見出すか日本のみとするか、対極的な立場を示していたが、これらを止揚したかのような言表もみられる。谷川徹三「日本文化原理の民族性と世界性」(『改造』昭17・10)がそれで、《文化は今日までのところ民族をその最大の基盤としてをります》(8頁)と断じる谷川は、次のように論じていく。

日本文化について具体的に考へてみますと、一、日本文化は今まで二つの世界文化の中にあり、その影響の下に形成せられた。二、支那文化としての世界文化は漢文

化、唐文化、宋文化などとして、それぞれの時代に影響を与へたが、そのそれぞれの文化が支那文化といふ形を取りながら、西方の文化、印度、イラン、アラビア、ギリシヤ等の文化要素をふくむ世界的規模のものであつた。三、近代ヨーロッパ文化としての世界文化は何よりも科学と技術との文化としてわれわれに影響した。近代ヨーロッパ文化の他の文化に対する特色は、物質的組織の力と自然統御の力に即ち科学と技術との文化にあるからであります。四、それらの文化の受容と消化とによつて日本はその文化的可能を実現し、潜在を顕在として来た。(9～10頁)

こうした日本文化の^{ハイブリディティ}雑種性を肯定的に指摘した上で、谷川は《東西文化の融合としての第三の文化を一つの新世界文化として築くのがわれわれの使命》(11頁)だと言明する。しかも、《新文化の形成はどこまでも日本の独自性を発揮しなければならない》という谷川は、同時に《しかしそれは日本の特殊性に執着してはならない》(14頁)と配慮も怠らない。

同じく、世界文化を主題とする中で、序列を明示しながら東西文化を対比していく議論も根強くある。そうした論文として、特集「近代の終焉・歴史への帰還」に寄せられた、柳田謙十郎「世界文化の二方向と日本」(『中央公論』昭17・12)がある。同論で《真の国民文化は常に必然に生々たる創造的形成の文化でなければならぬ》という柳田は、《皇祖肇国の御精神とはまさにかくの如き生々たる自発自展的精神であつたのであり、われわれの今日の世界史創造の大業も我々の民族のこの伝統的精神の発露として、常に新たに、日に日に新たなるものを生み出しゆくこの無限創造的衝動によつてのみ成就されてゆくことができる》(5頁)と揚言しては、《世界文化の方向》として《明確な区別を以て相対立するところの二つの方向》——《形成作用的な行為の方向に著しき歴史的発展を見せた

ヨーロッパ人の伝統的文化であり、他はむしろ作られた形の底に限りなく深く人間存在そのもののノエシスの根柢を直観する方向にその自覚を掘り下げて行つた東洋の精神的文化》(8頁)といった二項対立を前景化する。その急所は、柳田によれば次のようなものである。

西洋の文化は外に形をつくるポイエシスの行為の方向に発展した外延的文化形而下的な物質的文化であるのに対して、東洋の文化は内無限に深く自我の存在の根柢を見る方向、形あるものをばどこまでも形なきものの影として見る直観的方向に発展した内面的文化、形而上的な精神の自覚の文化であると。(13頁)

さらに柳田は、《西洋の知識が分別悟性的な技術智行動智であるのに対して、東洋の智はどこまでもかかる差別に即しつつ差別をこえた平等智、定慧一体としてそこに全人生が究局するところの涅槃の世界が開かれるやうな究竟智である》(17頁)、あるいは《前進的直線的なることを以てその特質とする西洋文化がどこまでもエロスの闘争的であるのに対して、円環的環帰的なる東洋文化はむしろアガペ的自然法爾的なることを以てその本質的方向とする》(18頁)と、東西対比に基づく序列を孕んだ二項対立を積み重ねていく。

以上、本節で検討してきた〈文化〉論を通覧すれば、偏狭なナショナリズムに映じる言表はことのほか少なく、大半は、日本文化の構成要素として東洋文化、さらには西洋文化に論及していた。ただし、純粋な日本文化をのぞく諸文化については、日本文化という装置の中で《消化》され、すでに日本化されたものとして位置づけられ、表面的には固有の日本文化であることが強調されていた。こうした言説が産みだされた要因としては、大東亜共栄圏を現実化していくにあたり、《諸民族》を文化的にも統合していく必要が生じたこと、西洋文化を否定・超

克した上での新文化が^{ハイブリダイテイ}目指されていたこと、が考えられる。こうした雑種性を日本文化に埋めこむことによって、大東亜共栄圏の多様な〈文化〉に対応しながら、新文化を形成・統合していく前提として、間口の広い日本文化論が大勢を占めていったのだ。

4：諸民族を指導する日本文化

前節においても考察したように、太平洋戦争開戦後における日本文化とは、どのような位置づけをとるにせよ、それ以前に比べ、多くの地域とそこに住む人々と関わるものとして構想する必要がある。それに伴い、〈文化〉論においても、大東亜共栄圏と圏内の民族⁸(への文化工作)が新たな課題として浮上し、日本文化波及の方針-手段が考案されていく。

たとえば、そうした課題を副題に掲げた石津照璽「新世界観の修成 諸民族の指導といふ問題を中心として」(『中央公論』昭17・12)においては、次のような注意が促される。

とくに圏内には幾千年の高き文化と伝統をもつ諸民族がをる。そして注意すべきことはその文化と伝統とは指導者日本のそれと根帯を連ね、あらはれた形に於て相通じるものをもつてをるのである。〔略〕このことは従来の抽象的な普遍主義文化理念を否定し、また一民族主義文化にのみ偏倚することの出来ぬ共栄圏文化建設といふ課題のもつ重要な要請であり約束であらう。(86頁)

《一民族主義》を排し《普遍主義》の必要性を提示した上で、石津は次のように論じる。

指導的地位にあるわが国は、他の諸民族の所を得ることを保証するのであり、それはまた諸民族の世界観や道義を十分に理解し尊重する。しかも日本的世界観の理解、信

奉を彼等に期することが右と違誤しない。その保証は国体の本義にもとづく。そして且つその共同の根拠に立ちながら、その遅れたるもの、尚ほ未だその根拠に於て積極的な形をもたぬものをわが国の先達と模範とに於て指導する——指導とはわかり合ひ和するといふ関係の上部の極であつて、信頼といふ下からの極に応ずるはたらきである——ことが、とくに諸民族への世界観的指導の要点であらうかと考へられる。(91頁)

こうして、石津は日本（文化）の優位を前提とした上で、しかし、《諸民族の世界観や道義》への一定の理解と尊重を保持しつつ《指導》していくことを謳って行く。その際には、こうした文化戦略の妥当性－正当性の《保証》（根拠）として《国体の本義》がもちだされる。こうした《諸民族》を想定した〈文化〉論は、戦局を受けて昭和18年に盛んになる。

たとえば、吉村正は「政治と文化」（『知性』昭18・1）において、満洲事変以来の日本の来歴を振り返りながら、次のようにして大東亜共栄圏について論及していく。

満洲事変に次いで支那事変となり、遂ひに大東亜戦争となり、今や我国は大東亜共栄圏を建設して東亜の新秩序を確立すると共に、世界の新秩序の樹立に対し大なる責任を負つて立つてゐる。そこで世界新秩序の建設者としてまた大東亜共栄圏の指導国として我国はそれに適した政治と文化を有することが緊喫の問題となつて来た。それは言ふまでもなく西洋的自由主義的なものであつてならないと同時に、我国固有のものでなければならぬ。こゝに我国古来の伝統に基く政治と文化の確立が強く要望されて来てゐるのである。

さて大東亜共栄圏は圈内諸民族の政治的結合であり、経済的共栄圏たると同時に、ま

たそれは一つの文化圏でなくてはならぬ。しかし共栄圏は政治的には一指導国の指導媒介の下に圈内の他の諸民族が信服し結合することを政治関係とするものであるから、従つて文化の点に就ても指導国の文化即ち我国の文化が共栄圏全体に光被すべきは当然のことである。(8頁)

吉村は、現代史上において日本を《東亜の新秩序》＝《世界の新秩序》の《指導国》と位置づけ、それに適した《政治と文化》の創出を謳う。その際に、吉村は大東亜共栄圏内の《諸民族》を指導し得るかたちでの日本文化確立の方途を、次のように論じている。

かくて今日我国の政治と文化が直面せる問題は、その消極的否定的方面に於ては先づ第一に自由主義並びに自由主義下に於ける政治と文化の無縁性を排撃すると共に、第二には明治維新以来撰取して来た外来文化に対し鋭き批判のメスを加へ而してその積極的建設的方面に於ては我国固有の文化の本質を究め、それを大東亜共栄圏の指導文化として無限に発展せしめることに在る。而してこの問題の解決こそは大東亜戦争の完遂と共に我等国民に課せられた最大の義務である。(8頁)

こうして、政治と深く関わる領域に〈文化〉を位置づけ、外来文化を排しては日本文化を重んじ、しかもそれを《大東亜共栄圏》を指導するために《発展》させること——つまり吉村は、狭義の日本文化ではなく大東亜文化の創出こそを《我等国民》の《義務》とする。

「日本文化の自己表現 ビルマより帰りて」（『中央公論』昭18・2）で清水幾多郎は、ビルマ滞在体験に即して、《諸民族》に対する日本文化のありかたを次のように論じていく。

日本の精神を東亜の諸民族に知らせるこ

とが根本的な重要性を有してゐる。日本文化の自己表現はこれを目的として行はるべきものである。〔略〕却つて健全な且つ切迫した欲求と衝動とに動かされてゐる南方の諸民族に向つては、日本文化はその自己表現に當つて全く別個の方法を執らねばならぬ。即ち日本人の近代的な生活を代表する如き側面に力点を置いて自己を表現せねばならないのである。〔略〕如何なる機械にせよ技術にせよ、日本人が丹誠をこめて作ったものに、特に日本の直面してゐる問題と負はされてゐる使命とを自覚して作ったものに、伝統的な日本の精神が生きて動いてゐないといふ筈はない。〔略〕南方の諸民族に向つて新しい日本の物を通してその底に生きてゐるものを示すことには成功するであらうし、また是が非でも成功せねばならないのである。(78頁)

ここで清水は、日本とも植民地とも中国とも異なる、新たな地域として南方への文化工作の重要性を主張していく。その際、清水は機械や技術など《近代的な生活》に関わるものに《伝統的な日本の精神》をこめることで、《諸民族》に対して日本文化の《自己表現》を実践していくこと、つまりは西洋文化(科学技術)を戦略的に援用していくことを主張する。これは、南方での文化工作に、日本文化に消化された西洋文化的要素を活用する戦略である。

他方で、大東亜共栄圏内において日本と共有し得る基盤を見出していこうとする議論もみられる。その代表として、三木清・中島健蔵「対談 大東亜文化」(『文芸』昭18・3)を参照してみよう。この対談では、冒頭、編集者による次の問題設定が示される。

今夜は大東亜共栄圏文化について話していただきたいと思ひます。ヨーロッパの場合なんかの場合と異り、大東亜の文化的統一なり確立のためには様々な面倒な条件があ

ると考へられます。日本や支那はとにかく、マライだとか、ビルマだとか、ジャワとか、フィリピンとか、一応今まで西洋文化によつて中断されてゐた形の固有文化が幾つもあり、それを含めての大東亜文化といふものを日本が確立しなければならない、さういふふうな状況だと思ひます。そこで、各地域の固有文化を大東亜文化の各单位としていかに蘇らせ、統一するかの問題、やはり各地に未だに浸潤してゐる西欧近代文化に対する問題、日本文化の大東亜共栄圏文化の指導者としての反省、そのやうな様々の問題が考へられると思ふんですけれども、さういつたことについて実際に現地から歸つていらしたお二人に話していただきたいと思ひます。(115頁)

そうした中、《東亜文化といふものが考へられるためには、何か現実の地盤が必要》、《それには西洋文化とは違つた一つの共通の地盤が必要なので、その地盤が問題》だという三木は、《総べての国が東亜といふ一つの地域にあつて、地理的な親近性を有つてゐること》、《人種的な近づきといふこと》、《産業上或ひは生活上の基礎的な条件が共通である》ことをまずは列挙する。その中で、《東洋の社会は農業社会で、しかも米作——それも灌漑による米作を中心にしてゐるといふこと》が《一つの共通な地盤としてやはり非常に重要な意味を有つてゐるんぢやないか》(117頁)という見通しを示す三木は、次のように述べていく。

農民社会および農民社会の心理、生活感情といふやうなものの伝統の有つ意味をもつと新しく解釈し直す、高度に思想化してゆくといふことが、重要ぢやないかといふことを僕は痛感したわけだ。そこに東亜文化の共通の地盤といふものを求めてゆかねばならない。(118頁)

さらに、三木は《指導して行くといった場合に、日本文化といふものをもう一度反省しなければならない》とも述べ、その理由については次のような議論を展開していく。

日本文化は東洋的な農民社会の特質を基礎的に有つてゐる。と共に近代性といふものをともかく持つてゐるわけなんだけれども、その間の調和といふものがまだ十分に自覚されないで、はつきりしてゐないと思ふ。しかし現実においては、その調和といふものが何かやはり日本において創られつつあるやうな気がする。さういふものを科学的に哲学的に捉へて、そこに日本文化の形式といふものをはつきりさせるといふことが必要だと思ふ。(122頁)

こうした議論の延長線上で、中島と三木は、次のような点で意見の一致をみている。

中島 [略] 僕は、今度の経験で大東亜圏の諸地域が、無論従来ヨーロッパの勢力下にあつたにしても、意外なほど濃厚に東洋の特長を残してゐるといふことを痛感して来たのです。

三木 その点は、フィリッピンは一番ヨーロッパ化され、殊にアメリカ化されてゐるといはれてゐるけれども、さういふ所へ行つて、僕が一番感じたことは、やはりアメリカ文化の影響といふものが浅くて、東洋的な性格を非常に濃厚に有つてゐるといふことなんだね。(124頁)

こうして、実際に大東亜共栄圏内のフィリッピン(三木清)とシンガポール(中島健蔵)とを体験してきた文化人は、それらの地域に《東洋》が色濃く残っていたと語っている。そのことをふまえて、中島は《日本と支那とが確実に手を握り合はなければ大東亜の理想なんといふものは成立しない》、《これは改めて南方でも痛感し

て来た事実》(125頁)だと述べて、日中戦争開戦以来の懸案事項である、中国との連携についても重要性を指摘していく。

このように大東亜共栄圏を指導する立場としての日本ではあるが、小山榮三「民族文化の指導について——原住民教育の方針——」(『日本評論』昭18・7)においては、大東亜共栄圏各地の諸民族に関しても、大東亜戦争の遂行に対してより積極的な姿勢を促していた。

彼等〔原住民〕は決して大東亜戦争の傍観者でもなければ、日本の賓客でもない。日本と共に米英に対して戦ふ意志を持たすこと即ちそれは武力のみならず生産増強を通じて日本と一体化すること(内的同化)——日本と「同生共死」の固き信念にまで原住民を導いてゆくことが原住民教育者の民族的最大使命であらう。アジア民族の解放は日本のみの問題ではなくして全アジア民族の問題だからである。(42頁)

このようにして、太平洋戦争開戦後、大東亜共栄圏を現実的に運営して行くことになった帝国日本の地理的拡張に伴って、〈文化〉論においても変容がみられた。こうした局面における〈文化〉論は、理論上において日本文化を核としながら大東亜文化、世界文化へと拡張していくばかりでなく、実際に、大東亜共栄圏内の《諸民族》へ日本文化(精神)を広め、理解させ、共有させていくことが課題となっていたのだ。その際には、大東亜共栄圏各地の《諸民族》と交流をもった文化人の発言も〈文化〉論に交差し、日本文化の固有性が改めて自覚された上で、日本文化に包蔵されていた様々な要素や、大東亜地域に共通する要素など、何かしらの普遍性をもった回路が探られていった。その結果、太平洋戦争末期にもかかわらず、〈文化〉論においては、日本文化の多様性が再検討されることになった。もちろん、それらの〈文化〉論も、表面的には日本文化の優秀性を大々的に掲げて

はいたのだが。

その後、昭和19年に入っても、限られたスペースの中、〈文化〉論は産出されていく。

そこでは、容易に想像されるように、中河與一が「思想戦と文芸」(『思想戦大学講座』時代社、昭19)において、《真の意味の文化とはどういふものかといへば、最も深く民族の地盤に根をおろしたところのものでなければならぬ》(366頁)と述べたように、民族主義的かつ狂信的な日本文化論が力をもっていた印象が強い。次に引く、宍戸儀一「決戦と文化」(『新文化』昭19・1)も、《切り替へ》とはいうものの、中河論に近い日本文化論である。

雄大な誇りと自信との回復がなくては、新文化の創成はあり得ない。まさに復活せらるべき古代の栄光を思へば、民族三千年の歴史を賭けた大戦争のこの決戦段階に、今までの謂ゆる文化を一擲し、改めて草莽の民として挺身し捨身するがごときことは、あまりにも当然である。すなはちこのこと自体が、文化の骨の髄からの根本的切り替へであり、やがて八紘に燦たる新日本文化の創成への英雄的発足を画するであらう。(27頁)

アジア諸国にも一定の配慮を払い、《地理的、人種的に見るならば、アジアは勿論一つではないが、しかしながら精神文化の面から見れば、アジアは系統を一にする民族国家の集団であつて、根元的に融和合流を可能とする資質をその各々の国家が内包してゐる》(4頁)という認識を示す、井澤弘「文化昂揚の原理——大東亜結集と世界新秩序の建設——」(『改造』昭19・1)も、つまるところこの時期らしい日本文化論であり、また、本稿で論じてきた日本文化／大東亜文化／世界文化といった三層構造を、タイトルにも示唆している。井澤は、《アジアとヨーロッパ、特に米英のそれとは、文化発生の基底と系列において全然異つたものを有つて居

るのであり、従つて異質対立的のものである》と東西文化を対照し、《アジアの新秩序建設は、過去数世紀に亘つて浸透を逞しふしたところの、これらの米英的精神文化の觀念の一掃を先決条件とする、即ち植民地的文化形態の清洗であり、精神的隷属化からの脱却である》と述べて、西洋(米英)文化を排した大東亜文化を宣揚する。さらに、井澤は《アジア文化》との通底性を探りつつ、次のように《「道の精神」》を特筆していく。

アジアにはアジアの文化を昂揚せしめることの出来る酵母が、われらの伝統の中に埋もれてゐるのだ。この貴重な精神上の糧を、再び土塊の間から見出して磨きをかけなければならない。而して新文化昂揚の指標となるものは、農耕勤労族としてアジアの伝統を、最も清く正しく保持して来たところの日本そのものであり、不易の指針となるものは過去数千年来日本を強く明く導いて来たところの日本の「道の精神」であらう。この唯一のものこそ、文化指導の基本原則であり、一貫不動の指針でなければならない。(9頁)

ここに、昭和10年代〈文化〉論——日本文化論の到達点＝帰結をみることは、十分可能である。この時期の日本文化論においては、西洋(文化)を対置し、太平洋戦争開戦後になれば、時に露骨なまでに英米(文化)を敵視し、他方で日本(文化)の指導の下に大東亜共栄圏内において《諸民族》とともに大東亜文化の昂揚を図り、《過去数千年》に及ぶ伝統、そして大東亜戦争を支えるイデオロギーである「道」(道義)という根柢が示されていった。

5：結論

最後に、昭和10年代の〈文化〉論を牽引したキーパーソン、前稿で中心的にとりあげた岸

田國士の太平洋戦争開戦後における発言を補助線として導入した上で、本稿の結論を提示する。ここまでの本稿2～4での議論が日本の対外戦略であったのに対し、岸田はそうした発言にくわえ、日本国内向けの〈文化〉についても積極的に発言をしていたからである。

昭和10年前後の日本では、世界的なファシズムの潮流に抗するため、文化人によって「文化の擁護」が謳われた。行動主義とも交錯するこの運動は、日中開戦以降、急速に萎んでいったが、その後も昭和10年代の〈文化〉論においてはしばしば参照される契機となった⁹。昭和18年、すでに大政翼賛会文化部長を辞していた岸田國士は「空地利用」(『文学界』昭18・2)に「文化の擁護」という小見出しを掲げ、次のように述べている。

私は嘗て二年前、「文化の擁護」といふ言葉は、この時局下に穩かでないし、さういふ考へ方も、戦争といふ国民的事業を遂行しつつある際、今日までの摸造舶来文化などに恋々としてゐるやうにみえてよろしくないから、潔く投げ棄て、今後、文化の「建設」とか「創造」とかいふ方向に一大転換を試みなければならぬ、と云つた。

これは一部の人々の同意を得たやうに思ふ。

当時、一般に「文化」の概念なり、意識なりは、今日とはおよそ違つてゐたことは事実で、云はゞ「文化」の国際性といふやうなものに大きな意義を与へ、戦争も文化の一表現だなどと云へば、忽ち反対者が現れさうな情勢であつたけれども、しかしまた、一面に、「文化」は如何なる状態に於て最も健全に伸び育つかといふ問題を、真面目に考へてゐた人々もゐたであらう。(11～12頁)

フランス留学経験をもち、近代的リベラリストといつてよい岸田には、同時に太平洋戦争を

遂行していく日本を支えていこうとする姿勢も明らかだった¹⁰。〈文化〉論についても同様で、そのキャリアからは「文化の擁護」の側に位置する岸田は、実際は新体制運動の中で、「文化の建設」へのシフトチェンジを主導した人物で、その根拠としては《戦争といふ国民的行事》が置かれる。それでいて、〈文化〉に対する相反する見方を許容するところに、岸田一流のバランス感覚があるのだが、それは上の引用につづく次の一節にも明らかである。

この時に当つて、私は、前言を翻すことではなく、まつたく新しい見地に立つて、「文化の擁護」といふ言葉を、もう一度使ひたくなつたことを告白する。

それは、戦争そのものではなく、戦争に附随する様々な予期せざる生活事情のなかに、また、政治そのものではなく、政策遂行の繁雑な手順のなかに、往々、日本文化のかくあるべきすがたを見失はしめ、かくあらしむべき方向を迷はすやうな処理法が、誤つて介入することがあり、これに対して、一言の注意を加へるものがないとあつては、まことに国家のために由々しいことだからである。(12頁)

ここで岸田は、単に「文化の建設」から「文化の擁護」へと遡行-後退しているのでもなければ、翻意-転向の告白をしているのでもない。おそらく岸田は、国家・対外レベルの〈文化〉論である「文化の建設」というコンセプトに、国民・国内レベルの〈文化〉論として「文化の擁護」を重ねあわせようとしているのだ。もとより、昭和10年前後に議論された「文化の擁護」における〈文化〉とは西洋を規範とした国際文化であったはずだが、ここでの〈文化〉とは、引用部の文脈に明らかなように、伝統的・規範的な日本の〈文化〉に他ならない。つまり、同じ「文化の擁護」とはいえ、往年のそれとは含意を異にしている。そうであれば、岸田が「空

き地利用」で述べる「文化の擁護」とは、戦時下日本の国民生活の中に、伝統的・規範的な日本文化の再発見を促す、政治的・啓蒙的な〈文化〉論なのだ¹¹。

その岸田は、やはり昭和18年に『力としての文化——若き人々へ』（河出書房、昭和18）を上梓するに際して付した「まへがき」を、次の一節から書きおこしていた。

私は最近二年間、大政翼賛会文化部の仕事を引受け、国民組織として整備すべき文化機構に関し、また、国民運動として取りあぐべき各種文化問題について、いろいろ自分でも研究し、各方面の意見も徴したのですが、なにしろその範囲は無限に広く、一つ一つの問題が極めて深い根柢のうへに立つてゐるといふことを知るにつけ、先づどこから手をつけるべきかといふことに屢々迷つたのであります。（1頁）

こうして、国内にまなごしをむけ、国民の〈文化〉を問題化していた岸田は、「地方文化の新建設」（『知性』昭16・7）以降、文字通り、地方文化運動／言説を牽引していくことにもなる¹²。「まへがき」に戻れば、戦局をふまえた岸田は、そこで《最も重要なことは、国家百年の計を樹てるための基礎は、なんと云つても、「日本文化」の伝統を国民一人々々の精神のうちに蘇らせることだと信じました》（1頁）と声明する。《国家百年の計》には、太平洋戦争の遂行－勝利が含意されるだろうから、岸田はこの戦争に勝つために、日本国民が《「日本文化」の伝統》を取り戻すことを目指していたことになる。しかも、公平な岸田は、《日本の文化は、現代の表面的混乱にも拘らず、民族の輝かしい歴史と、国土の豊かな伝統とによつて、その特質は今なほ澁刺たる生気を保ち、時に応じ、国民決死の相貌となつて、強敵を粉碎する力を示す》と述べると同時に、《文化能力のある部分の渋滞》という《弱点》（4頁）も指摘していた。

その上で、岸田は結局のところ、国内においても（改めて提示された「文化の擁護」と重なる）「文化の建設」という実践目標を、次のように掲げていた。

こゝに於て、「力としての文化」といふひとつの見方から、新しい文化の建設が考へられるとともに、これこそ、国を挙げての努力に値する、実践運動の中心目標でなければなりません。（4～5頁）

縦割りにされた文化領域の横断－連携による活性化は、大政翼賛会文化部長に就任して以来の岸田の持論だが、ここでも岸田はそのことを目標として掲げ、国内においても《新しい文化の建設》を、《国を挙げての努力》として目指していく。こうした「文化の建設」が、大東亜共栄圏を射程に収めた〈文化〉論と共振することはいうまでもない。してみれば、ここで論及した岸田の〈文化〉論は、対外文化工作を強く意識して展開された昭和10年代の〈文化〉論に足並みを揃えつつ、それを国内－国民向けに流用したものだといえる。

これまでの本稿の検討を総合して、以下に昭和10年代後半における〈文化〉論の動向・特徴について、結論を提示する。まず、〈文化〉論にとって、最も重要な変数となったのは太平洋戦争とその戦局の展開に伴って日本が抱えこむことになった大東亜共栄圏であった。そのことが、従来の日本文化を修正・更新していく基底的な動機となって、大東亜文化／世界文化へと拡張していく〈文化〉論の核として、日本文化は位置づけられていった。その過程では、日本文化の古層や西洋文化が、現在の日本文化に包摂されたものとして再認識され、また、東洋や世界とも通底する普遍的な要素も日本文化に再発見されていった。それらが総合された日本文化が、それゆえ南方諸民族を指導する地位にあることも再確認された。

総じて、昭和10年代後半の〈文化〉論とは、

太平洋戦争開戦後、戦局とゆるやかに連動しながら産出された日本文化論を核として、〈文化〉を戦争や大東亜共栄圏に近接させ、その意義や文化工作の方策を言表しつづけることを通じて、各論それぞれの主題とあわせて〈文化〉の意義や有用性をアピールすることにもなった。従って、本稿の検討からは、太平洋戦争開戦後の昭和10年代後半とは、〈文化〉が社会的有用性を獲得していく過程であると同時に、政治からの自律性を失っていく過程でもあり、〈文化〉の政治化は進行した、と結論づけることができる。こうした過程・変容をたどったがゆえに、〈文化〉論は戦時下にも一定の影響力を保ち得たのだが、それは〈文化〉が政治と合一していくことと同義でもあった。

※本文・注ともに、同時代に即した資料は元号で、そのほかは西暦で書誌情報等を示し、引用に付した傍点はすべて原文による。

- ¹ 拙論「昭和10年代における〈文化〉論：I——大政翼賛会文化部長・岸田國士の発言を中心に」（『湘南フォーラム』2019・3）。
- ² 赤澤史朗ほか編『戦時下の宣伝と文化』（現代史料出版、2001）、永島茜「わが国における文化政策論の変遷——昭和10年代における出版物を中心として——」（『文化経済学』2004・3）ほか参照。
- ³ 赤澤史朗「戦中・戦後文化論」（『岩波講座日本通史第19巻 近代4』岩波書店、1995）、288～289頁。
- ⁴ 拙論「同時代のなかの「文学非力説」論議」（『国語国文』2018・10）参照。
- ⁵ 文学的言説については、小田切進編「十二月八日の記録」、「続・十二月八日の記録」（『文学』1961・12、1962・4）に詳しい。
- ⁶ 拙論「軍政下昭南市における文化工作（日本語教育）一面——陸軍報道班員・井伏鱒二「花の町」を手がかりに」（『立教大学日本文学』2019・7）参照。

- ⁷ 吉田裕『日本軍兵士 アジア・太平洋戦争の現実』（中央公論新社、2017）、14～22頁。
- ⁸ 大東亜共栄圏各地の人々を指す際、この時期の言説は一様に《諸民族》という言葉を用いている。国や民族を個別化具体化することないままに、表象できる利便性からだと思われる。同時期には、高見順『諸民族』（新潮社、昭17）という小説本も刊行されている。
- ⁹ 拙論「昭和一〇年前後・世界化する〈文化〉——文化擁護国際作家会議／知的協力国際会議」（『人文研究』2020・3予）参照。
- ¹⁰ 古山高麗雄に、《私には岸田國士が、戦争には勝たなければならぬという考えの外に立とうとしなかったことは、崩壊を避け、しかも急ごうとした裏腹の意識の共存であり、また、勝つにしても、当時の政治家や軍人の唱える考え方に国民が同調してはいけないという基本的なものを堅持したことも、崩壊を避けることであったと同時に、崩壊を急ごうとしたことであったと考える》（『岸田國士と私』新潮社、1976、234頁）という指摘がある。なお、武田康孝「文化と政治」（小林真理編『文化政策の現在1 文化政策の思想』東京大学出版会、2018）もあわせて参照。
- ¹¹ 岸田國士『生活と文化』（青山出版社、昭16）所収の各論を参照。
- ¹² 移動演劇にも関わった岸田を中心に、地方文化論は隆盛となり、上泉秀信『地方と文化』（高山書院、昭17）、高橋健二『戦争生活と文化』（大政翼賛会宣伝部、昭18）、古谷綱武『生活の中の芸術』（翼賛出版協会、昭18）などが刊行された。